



「今」を生きる私のために

私は十四歳

文*生徒作文

絵*鈴木びんこ

私は十四歳。部活は去年の夏にやめた。

期待と希望に胸をふくらませて入った中学校だった。先輩がとても大きく見え、自分も大人になったようで、いい気分だった。

小学校から続けていたバスケットを、当然のことのように続けるつもりで入部した。しかし、その三か月後に、私にとって大きな転換期が訪れたのだ。

私がバスケットを始めたのは、小学校四年生のとき、友達につられて何気なく入ったというのがきっかけだった。そのころのバスケット部は市内でも弱いチームで、勝敗より楽しいボール遊びをするといった感じだった。それが、バスケットを指導する先生が転任してこられて、きたえられ、六年生のときには市内でベスト8という成績を収めるほどになった。私は、ポイントゲッターの五番の背番号を付けていた。苦しいことを乗り越えての勝利のうれしさを、実感できる毎日だった。友達といっしょにあせを流したり、たがいに支え合い、泣いたり笑ったりした。その中で、集団の一員としての自分の立場やチームワークから生まれる真の友情を学んでいた。楽しい思い出と充

10

5

実感をあたえてくれる最も自分らしい時間だった。

ところが中学でのバスケットは、想像以上にきつかった。勉強との両立ができない。スターティングメンバーにもなれない。つらい練習は、自分のプラスになるどころか、失うもののほうが大きくなっていくような気がした。

自信が少しずつうせ、つかれた心と体の中で、むなしさがつのり、何のためにバスケットをやっているのだらうと、漠然と考えるようになった。どうしたらよいのか、答えを見つける余裕もなかった。自分を取りもどすための時間が欲しかった。

5

迷ったけれど、バスケットをやめることにした。気がつくと、今までいつも周りにいた友達が一人もいなくなって、学校でも一人で行動することが多くなった。とてもさびしい日々が続いた。

10

私は、これだけはだれにも負けない、というものをもっていい人にあることができる。自分の好きなことを見つけ出し、頑張っている人をいいなあと思う。私は今まで、運よくいろいろな賞をもらってきた。でも、それらは、親や先生の力を借りて得たものだった。たぐさんのことを少しかじっているけれども、私の中にかくれている本物の力を出していなかったように思う。中学生になっても、だれの援助もなしには満足に何もできない。無力な自分がそこにいたのだった。

15

二学期から自分に合った部活を探した。卓球部、ソフトボール部、バレーボー

20





ちがうことに挑戦してみたいと思つてバスケットをやめたのは何なのか！ 勉強、ピアノ、スポーツ、料理……、まだまだ果てしなくやってみたい新しいこと。それらは、学校の部活のわくには入りきらないことが多かった。

ル部……、仮入部させてもらったりもした。しかし、どれも自分の思いえがく部活ではなかった。有り余った体力とあせる気持ちを、毎晩なわとびやジョギングをすることでおさえていた。鏡を見ると、私は、何をやっているのだろうかという気がし、自分で自分をどんどんだめにしていくようで、こわかった。

二学期も終わり三学期をむかえても、何も始められなかった。あせる気持ちがふくらみ、なやんでいたが、あるとき、もつと

時間がたつにつれ、今、新しいことを始めるのは、新たな自分に出会うためのチャンスなのではないかと、少しずつ思い始めていた。

それまで、私がなやみ続けている間も、私のやることに協力してくれていた両親が、「部活をやめたことは決して負けたということではない。回り道をしているうちに、ほかのいろいろなことに出会えるかもしれないよ。」

と、公民館でやっているジャズダンスをすすめてくれた。体力には少し自信があったが、今までと全くちがう運動に、思うように動けずとまどった。でも、久しぶりに思いっきり体を動かし、今までのモヤモヤも少しずつ晴れていくようで、すがすがしい気持ちになった。

ダンスは、自分の体だけでなく指の先までも使つて表現するもの。日頃、みんなの前でおどるなんてはずかしくて、体育祭のときだつて照れていいかげんにやっていた。けれど、回を重ねるたびに、少しずつその振りや曲からくる自分のイメージや思いが出せるようになり、表現する楽しさや喜びが味わえるようになった。

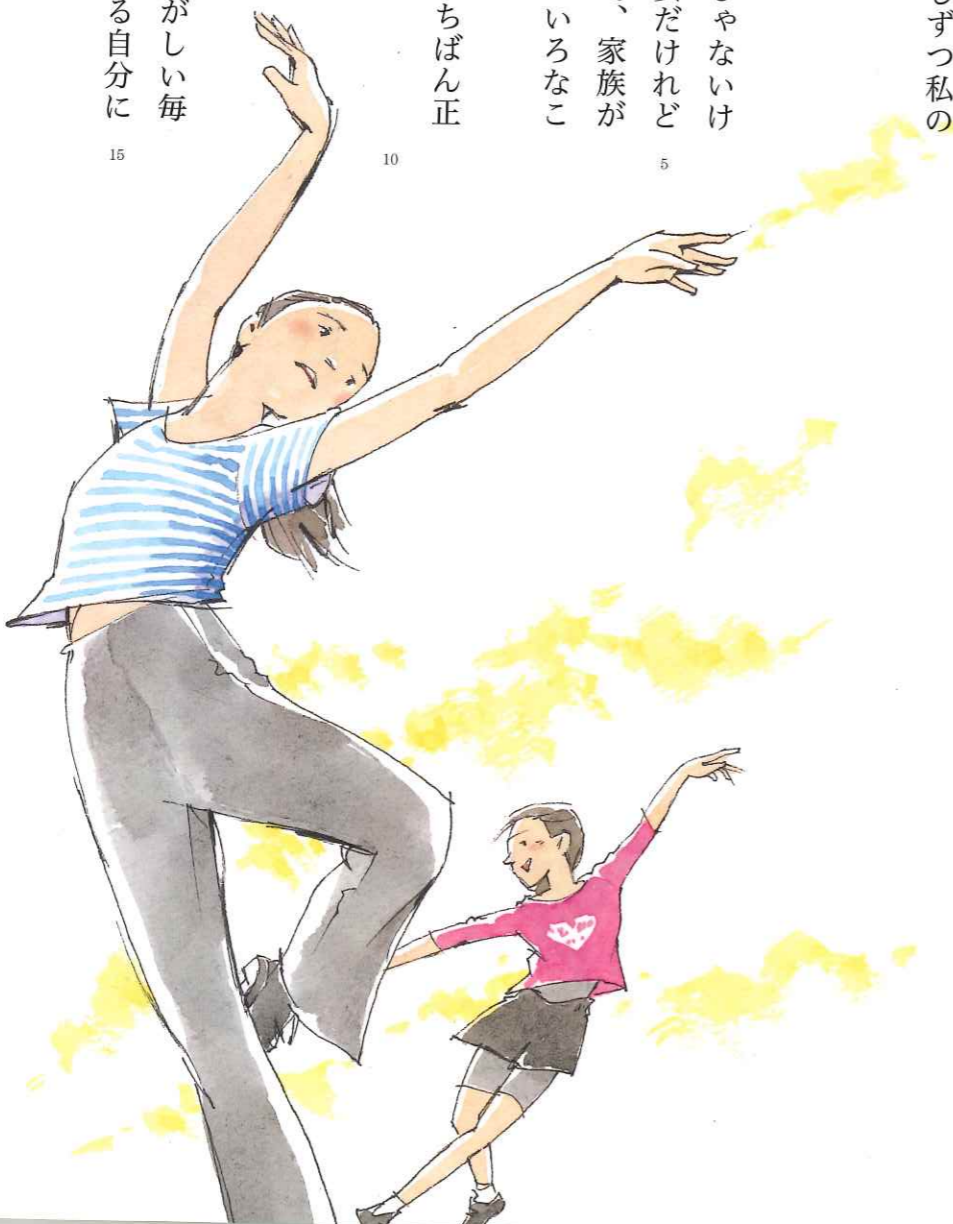
私の中で、何かが変わり始めた。少しずつ私の姿が見えてきた。

十四歳。子供と大人の間の時代。

子供だけれど、子供じゃない。大人じゃないけれど、大人みたいにふるまいたい。不安だけれども、自分を作る大切な時期。友達がいて、家族がいて、学校があつて、先生がいて、いろいろなことがあつてよいのだと思う。

後悔のない生き方をしたい。自分がいちばん正しいと思つた道を歩き、思いっきり生きたい。今風じゃないと言われてもかまわない。今だから、それができると私は思っている。

私は十四歳。今は、自分みがきでいそがしい毎日を送っている。いつか、かがやいている自分に出会うために……。



考えてみよう!

- 1 なやむ中でジャズダンスに出会えたのは、「私」がどんな気持ちをもち続けていたからか。
- 2 自分らしい生き方をするためには、どついついことが大切か考えてみよう。

つぶやき

.....

.....

.....

.....



ばなしの女王

文*生徒作文

絵*ヨコタユリコ

「陽子ようこっ！ ちょっと来い。」

階下から祖父の大声が聞こえる。

「あっ、またやった……。」

私は、のそのそと階段を下りて、トイレのスリッパをきちんと並べ直す。

こんなことが、今までに何十回くり返されてきたことだろう。

小学生のころ、私は家の中で、『ばなしの女王』と言われていた。

だれが付けたのだろう。いつの間にか、それが私のニックネームになった。

最初、何も分からなかった私は、「女王様だってさ……。」と得意になっていた。しかし、後になっ

てよく考えてみると、『ばなしの女王』の『ばなし』とは、出しっぱなし、読みっぱなし、つけっ

ぱなしのこと、つまり『ばなしの女王』とは、だらしない女の子の代名詞であったのだ。

今にして思えば、このニックネームは、私を皮肉って付けられたのだから、そのとき何かの形で



自分を反省すればよかったのかも知れない。でもそのときの私は、『ばなしの女王』と呼ばれれば呼ばれるほど、すてきなニックネームに思えるのだった。

しかし、そんなのんきなことを言っていられないことが起きた。それは小学校四年生のときだった。母からおふろをわかすようにたのまれた。ちょうどテレビを見ていた私は、

「今とってもいいところなのに。」

とぶつぶつ言いながら、水を入れてガスに火をつけた。

問題はその後である。夢中になってテレビを見てみると、母が血相を変えて飛びこんできて、

「陽子、おふろ、いつまでわかしているの！」

と大声で言った。

おそろおそろふる場へ行ってみると、そこら中、湯気がもうもうと立ち上っていた。



「もう少し気づくのがおそかったら、火事になっていたかもしれないんだよ。」

母はおこるどころか、あきれ果てているようだった。私は、自分のやった『ばなし』の、事の重大さに心臓の止まる思いがした。

学校でも、こんなことがあった。

クラブの練習の前に更衣室で着替えをして、ぬいだスカートやブラウスや上ばきなどを、ほっぼり出していつてしまったのだ。そして、クラブが終わって、さあ早く着替えようと思い、更衣室にもどると、
(ない、着替えがない。)

あわててロッカーを探したが、あるのはほかの人の物ばかり。

「私の着替え、どつかいっちゃったっ！」

友達も、自分の荷物のかげやロッカーのすみまで探してくれた。

こんなふうに、家でも学校でも、私の『ばなし』の失敗は自分だけにとどまらず、いつも何か他人に迷惑をかけることになってしまう。

それから私は、この『ばなしの女王』という汚名を返上しようとして決意したのだが、そうそう簡単に直せるものではなかった。

中学二年生の今、ようやくトイレのスリッパが行儀よく並ぶようになった。気のせいか祖父の大声も、あまり聞こえなくなったように思う。

しかし、ここまでするのに、さまざまなおことがあった。

『ばなし』をしてはいけない、いけない。」と意識しすぎて、



人の入っているトイレやふろの電灯を消してしまったこともあった。消したとたんに、

「まだ、入っているよ！ 陽子、消さないでよ。」

私はあわてて電気をつけて、

「ごめんさい。」

とさげぶ。

まだまだ、『ばなし』が完全に直ったとはいえない。

私だって好きで『ばなし』をやっているわけではない。自分のわがままで、家族の言うことを聞かないのでもない。『ばなし』などやりたいとは思わないのに、どうしてもやってしまうのである。

「もうしない。絶対にしない。」

と固くちかうのだが、二度、三度とくり返してしまうのは、自分の心の弱さなのだろうか。ほとほと自分が情けなくなってしまう。



つぶやき

考えてみよう!

- 1 作者が「ばなし」を直そうと決意したのは、どのような気持ちからだろう。
- 2 望ましい生活習慣を身につけることで、自分の生活や生き方をどう充実させられるだろう。